

「^{つまず}躓きのキリスト」

ヨハネによる福音書 3章31～36節

今月の箇所は、2章の終わりにも似て、^{つな}繋ぎの挿入句のような感を与える箇所となっています。しかし、繋ぎ的な箇所だからといって、どうでもいい箇所ではない。そうした部分にこそ 時として、信仰の核心に触れる本質的なメッセージが隠されてもいる。そのことは、以前 申し上げたかと思えます。今回は、私たち人間とイエス・キリストの神との「ものの見方の違い」に的を絞って、聖書の語りかけを聴ければと願っています。

今月の聖書は 32 節で、「この方は、見たこと、聞いたことを証し^{あか}されるが、だれもその証しを受け入れない」と語ります。実際、聖書は^{つまず}躓きで満ちていないでしょうか。例えば、誰もが感じるものの一つに、世の中の矛盾があります。筋の通らないことが多すぎるからです。そして、思います。「神がいるなら、どうしてこんなにも悲劇が起り、こんなにも悪^{はびこ}が蔓延るのか」。ごく自然な、ごく当然な問いと言えるでしょう。私もまた、矛盾を感じざるをえません。

ならば、なのになぜ キリスト教の信仰に生きるのか。そうお尋ねになるにちがいません。聖書のすべてを完全に理解しているわけではない。問われた質問に、何から何まで一つ残らず答えられるわけでもない。なのに、どうして・・・？ その答えはこの私にとってはただ一つで、実は、それ以外のどこにもありません。それは、理解できない、分からないことがどれほどあるにしても、他の誰でもないイエス・キリストというお方がこの世に生まれ、この世界に生きられた。そして、真実な生涯を生き、そしてまた、真実そのものの死を死なれた。それは、私たち人間のそれを超えていた。それがこの私にとって否定しがたいこととして響くからです。その主イエスの真実に出会ったからこそ、だから私はその言葉を信じ、「なお生きて共にいる」というその約束^{みて}を信じて、善意のその御手に信頼して生きているわけです。

とはいうものの、キリストもまた、確かに「^{つまず}躓きのキリスト」と言えるように思います。イエス・キリストが示された神は御子^{みこ}を十字架に送って そこで死ぬに任せる弱く無力にも見える神であり、人の勝手になすがままにするようにも見える神です。私たちの世界ではとうてい、人気など出そうにありません。事実、ユダヤの人々も自分たちの利益のために力をもってスッキリさせてくれる神を求め、その期待に合わない主イエスを十字架の死に追いやりました。「この方は見たこと、聞いたことを証し^{あか}されたのに、だれもその証しを受け入れない」と聖書が語るキリストは たしかに、躓きのキリストです。けれども、聖書は続けて、こうも記しています。33 節、「その証しを受け入れる者は、神が真実であることを確認したことになる」。私たちははたして、低く貧しいキリストの内に何を見るのでしょうか。神の子を気取ったものの、結局 化けの皮^はが剥がれて、

自滅の惨めな死に様を晒した「ハッターリ屋」の姿でしょうか。それとも、立ち戻るべきいのちの場所に私たちを導くため、自らのすべてを献げて、最後の最後まで神の愛を生き抜かれた「神の人」の姿でしょうか。

今月の箇所は、「上から来られる方は、すべてのものの上におられる。地から出る者は地に属し、地に属する者として語る。天から来られる方は、すべてのものの上におられる」(31)と始まっています。バプテスマのヨハネの言葉として、主イエスは上から来られたお方だが、自分はこの世に生まれたものにすぎない、と語るものです。ヨハネの弟子たちの中に、「イエスが何だってんだ！ 自分たちの師のほうが上だ」と、主イエスに妬みの心を燃やす者たちがいたのでしょう。ヨハネは、そうした弟子たちに向かって言います。「イエス・キリストは天から来られた。神の御許から来られた。自分もまた、その御支配のもとにある」。そう語って、嫉妬に囚われる弟子たちとは対照的に、主イエスにその場を譲ったのです。

ですがこれと同時に、今回の箇所はこれだけでなく、幾つか気にかかる重要そうな言葉で始められていることにも気づかされます。まずは「地から出る者は地に属し、地に属する者として語る」との上述の言葉がそれであり、「この方は、見たこと、聞いたことを証しされる」との言葉がそれです。さらには、「が、だれもその証しを受け入れない」との言葉であり、しかし「その証しを受け入れる者は、神が真実であることを確認したことになる」との言葉です。31節から33節の言葉です。

事件の真相を知りたいと願うなら、私たちは、当の事件を目の当たりにした直接の目撃者に尋ねなければなりません。事件をその目で実際に見て、現場の有り様をその耳で実際に聞いた目撃者、にです。つまり、いわゆる二次証言ではなく、一次証言こそ信頼に足るものだからです。今月の箇所は前段からの続きで、語っているのは前回同様バプテスマのヨハネですが、そのヨハネはですから、こう言わんとしているのではないのでしょうか。「自分もまた、神について語る。しかし、自分は地に属する者であり、神を直接、目の当たりに見たわけではない。この方（イエス・キリスト）こそ、神をじかに知るお方であり、その目で直接見たこと、その耳で直接聞いたことを語られる」と。すなわち、主イエスは神の独り子として、神の所に、神と共におられた。そして、その本質において、神と等しいお方である。だからこそ、その語るところは、じかに見たこと、聞いたことなのだ。それがバプテスマのヨハネの口を介して述べられたヨハネ福音書の証言と言えるでしょう。ですから、そのようなイエス・キリストに神のことを尋ね、いのちの在り処を尋ねるがよい、と。それが、今月の箇所の書き出しとなっています。

しかしながら、この世の現実はそれほど甘くはありません。「だれもその証しを受け入れない」というのです。それにしても、なぜなのでしょう。私たちはなぜ、主イエスの証しを受け入れないのでしょうか。理由はもちろん、あれこれあるかと思えます。が、いずれにせよ、聖書の突き出す真理として、その底に動かしがたい躰が置かれているのは事実でないのでしょうか。それは、聖書はその本質において一貫して、私たちの常識とは反対の仕方でのメッセージを語る、というこ

とです。別な言い方をすれば、聖書は一貫して「にもかかわらず」「だからこそ」と、私たちの常識とは逆の仕方かたで神の真理を差し出すということです。神は全能のお方である。にもかかわらず、この私たちを愛するからこそ、その力を完全には用いられず、私たちに自由というものを与えてくださった。そればかりか、エゴと勝手をのさばらせ、その自由を台無しにして、世界を混沌こんとんに陥れているこの私たち。その責任すらとろうとしない。そんな私たちにもかかわらず、私たちを愛するからこそ、神は御子みこを送り、痛みの限りをその身に負いながら、いのちの源を私たちに示してくださった。このような「にもかかわらず」と「だからこそ」の中に、聖書の聖書たる所以ゆえんがあるように思います。それは実際、常識を脱ぎ捨てられない間は、容易に腑ふに落ちるものではありません。ですが、本当の真理というのは 時として、常識の外にあることがあるのではないのでしょうか。聖書の差し出す、私たち人間の常識とは逆のものものの見方。それを信じられるかどうか。それが、主イエスを信じる信仰の分かれ道であり、分岐点であるように思われます。

本質的な躰つまずきの中に置かれているこうした「にもかかわらず」「だからこそ」という聖書の真理は様々な箇所に見て取れますが、今回は使徒パウロの出来事の内にそれを見たいと思います。使徒パウロは周知のとおり、「パウロなくして、キリスト教なし」とまで言われる、キリスト教史上最大の伝道者です。ユダヤ教のリーダーとしてキリスト教徒迫害の先頭に立っていた人物が、一転、そのキリスト教のリーダーになる。そうした数奇で劇的な生涯を生き、稀に見る人物でもありました。そのパウロの回心の出来事の内に、聖書の語りかけとして、私たちは何を見るか。今回はあえて、ノンクリスチャンの文章でその回心前後の様子を御紹介したいと思います。阿刀田 高あとうだ たかしという作家の文章です。阿刀田さんは短編小説の名手として知られ、日本ペンクラブの会長や直木賞の選考委員も務められました。いわゆる信仰者ではありませんので、慣れ親しんだ聖書の読み方とは微妙に異なる部分もあつたりはしますが、日本基督教団の牧師だった大塚野百合先生と親しい間柄にあらわれました。友人でもあつて、ひょっとすると 私たち以上に聖書に通じておられるかもしれません。何より、作家ですから、文章が分かりやすく、生き生きしているのが引用の理由です。『新約聖書を知っていますか』からの文章です。

パウロについては「タルソス生まれのユダヤ人、幼いときからパリサイ派の教育を受け、熱烈なユダヤ教徒であった。ギリシア語を話し、ローマの市民権を持っていた」と、その出自しゅつじが説明されている。

.....

・・・パウロは生まれながらにしてユダヤ教、ヘレニズム、ローマの力・・・つまり当時の三大勢力と接点を持っていたわけである。

パリサイ派は ユダヤ教の中でもとくに律法に厳しく、布教に熱心な一派であった。その教えを受けたパウロは・・・筋金入りのユダヤ教徒だったから、イエスの教えに従う人たちを見て、

—なんだ、ヘンテコなものがはやり始めたな。けしからん—

しばらくは その弾圧の急先鋒となってキリスト教徒を迫害していた。まったくの話、どこかにキリスト教徒が隠れているときけば、大祭司の命令を受け、わざわざ出向いて行って捕縛連行するなど、徹底した弾圧者だったのである。殉教者ステパノの殺害にも彼は加わっている。

あるとき、パウロはエルサレムを出てダマスコへ向かった。このときも キリスト教徒の迫害が目的だった。・・・この地帯特有の岩砂漠の道を急ぎ、パウロたちの一行がダマスコの近くまで来たとき、突然、天から光が射し、彼を包んだ。

パウロが地に倒れると、声が聞こえた。

「サウロ、サウロ、なぜ私を迫害するのか」

サウロというのは パウロのヘブライ系の名前である。

「あなたは・・・だれですか」

声は 天から降り落ちて来た。

「私は、あなたが迫害しているイエスである。起きて 町へ入れ。あなたのなすべきことが知らされるだろう」

声ばかり聞こえて 姿は見えない。神の啓示だろうか。パウロは立ちあがり、眼を開けたが、なにも見えない。同行者がパウロの手を引いて ダマスコの町へ入った。

お話変って ダマスコの町にアナニヤという男が住んでいた。キリストの教えを守る忠実な信徒だった。

前後の事情はよくわからないが、^{まぼろし} 幻の中にイエスが現われ、

「アナニヤよ」

と呼びかける。

「ここにおります」

「立って、直線通りに行け。ユダの家で タルスス生まれのサウロが祈っている。その男は、眼が見えない。あなたが行って、手を置けば、眼が見えるようになる。彼はそれを待っている」

アナニヤは タルスス生まれのサウロと聞いて驚いた。

「その男は迫害者です。わるい噂^{うわさ}をたくさん聞きました。あなたの教えを守る人々を捕らえるためにやって来たのです」

だが イエスは^{がえん} 背じない。

「行け。その男こそ 私が選んだ者なのだ。異国の民に、諸国の王に、そして イスラエルの子らに私の名を伝えるために選んだ器なのだ。私の名を伝えるためにどれほどの苦難を負わなくてはならないか、私が彼に示そう」

.....

アナニヤは 直線通りのユダの家を捜して訪ねた。.....

「ごめんください」

ユダの家にはたしかに 眼の见えない男がいた。三日三晩、食事もせず^ぶに臥せていた。アナニヤが事情を話し、イエスの幻に命じられた通りに パウロの手の上に自分の手を置き、

「主イエスが私をお遣わしになったのです」

と告げると、パウロの眼から鱗^{うろこ}のようなものが落ち、たちまち 眼が見えるようになった。感動したパウロは洗礼を受け、食事をして元氣を取り戻した。

パウロの回心と言われる奇蹟^{きせき}である。

イエスの声は パウロにしか聞こえなかったらしい。だから、それを幻聴とかたづけ^{すくいぬし}ることはやさしいが、それでは この出来事の神学的な意味が失われてしまう。

パウロ神学の根底にあるものは「イエスは神の子であり、救世主である」という認識である。パリサイ派の教徒であったパウロは、

「イエス？ どうせいかさまにきまっている。神の子だなんて、とんでもない」

と思い、いかさま師を信ずる人々を否定し、弾圧していたのだが、死んだはずのイエスが自分の前に現われ、呼びかけてくれたことにより、

— これはいかさまなんかじゃない。噂通り 神の子なんだ —

と、納得したわけである。

.....

ともあれ、思考のコペルニクスの転回とも言うべき変転が起きて、パウロはパリサイ派を捨てて キリスト教徒となった。弾圧者が信奉者^{しんぼうしや}に変わったわけである。

これが、キリスト教史上最大の伝道者と言われる使徒パウロの回心前後のあらましです。キリスト教迫害^{きゆうせんぼう}の急先鋒^{ちまなこ}だったユダヤ教のリーダーが、一転、血眼になって弾圧していたそのキリスト教の熱烈な伝道者になる。180 度の大転換です。そうそうある話ではありません。そして、この回心の出来事と関連してしばしば語られるのが、なぜパウロが使徒とされたのかという、パウロが選ばれた その理由です。皆さんは、どう思われるでしょうか。どうして パウロが選ばれたのか？ こんな説明をよく耳にします。パウロはユダヤ教のエリートでひとときわ教養があり、旧約聖書にも人一倍通じていた。しかも、ギリシア語を話し、ローマの市民権も持っていた。つまり、ユダヤ教、ギリシア文化、ローマ政治という、世界伝道に必要な 3 つのものを全部 身に着けていた、と。阿刀田さんの文章にもあったとおりです。神はそれらのものを身に着けていたパウロに目を留め、それらが揃^{そろ}っていたので、だからパウロを選び、それらを御自分の働きのためにお用いになられたのだ、というのです。いかがでしょうか。「なるほど！ 理に適^{かな}っていて、よく分かる」と、普通はそう思われるかもしれませんが。けれども、聖書のものの見方が私たちの常識^{くつがえ}を覆^{くつがえ}すのはまさにそのところにおいてなのではないか。そう思われています。ほかならぬそこにおいて、聖書はこう告げているように思うのです。「神は、生まれが良く、学問にも通じていて、教養があったから、

だからパウロを選ばれたのではない。経験も能力も、また社会的な身分も同じである。パウロの持てるものが神を動かしたのではない」

バプテスマのヨハネは、マタイによる福音書で語ります。「『我々の父はアブラハムだ』などと思ってもみるな。言うておくが、神はこんな石からでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる」(マタイ 3:9)。自分たちは偉大な先祖アブラハムの子孫だと、その血筋を誇り、そこに安心の裏づけを置いていた プライドの高いユダヤ人たちに向けられた言葉です。パウロ自身も、フィリピの信徒への手紙で語っています。「肉にも頼ろうと思えば、わたしは頼れなくはない。・・・わたしは生まれて八日目に割礼を受け、イスラエルの民に属し、ベニヤミン族の出身で、ヘブライ人の中のヘブライ人です。律法に関してはファリサイ派の一員、熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については非のうちどころのない者でした。しかし、わたしにとって有利であったこれらのことを、キリストのゆえに損失と見なすようになったのです。そればかりか、わたしの主イエス・キリストを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみています。キリストのゆえに、わたしはすべてを失いましたが、それらを塵^{ちり}あくと見なしています」(フィリピ 3:4~9)。そして、ガラテヤの信徒への手紙で、聖書の信仰の核心を明らかにします。「人は律法の実行ではなく、ただイエス・キリストへの信仰によって義とされる」(ガラテヤ 2:16) と。パウロは「ただイエス・キリストへの信仰によって義とされる」と言いますが、これに対するものとしての「律法」とは、その本質的意味合いにおいて、自分の手柄として、また自分の持ちものとして私たち人間が誇りにするもの、そのすべてを意味していると言えるでしょう。良い行ないはもちろん、生まれも学歴も、地位も名声も、そこに人間としてのプライドを置き、頼りを置くなら、それらもすべて、律法と呼ぶに等しいものとなります。だとしたら、聖書が告げるのはこういうことではないでしょうか。すなわち、それら 私たちの手柄や功績、また人間の持ちものは神の選びや救いの理由ではない、ということです。それらを選びや救いの理由にすることは、キリストを信じる信仰とは相いれない。パウロのあれこれが結果として生かされたということはあるかもしれないが、しかしそれらが、パウロが選ばれて用いられた そのそもそもの理由ではない。パウロが有能で、他の者より良い条件を備えていたから、というのではないのだ。そうではなく、事はむしろ逆で、ユダヤ教に凝り固まって、キリスト教を潰すことしか頭になかった そんなどうしようもないパウロだったにもかかわらず、神はこれを選んで変えてくださり、そして用いてくださった。言葉を換えるなら、そんなどうしようもないパウロだったからこそ、神は愛と恵みの内に これを御自身の御用に向けられた、と言えるのではないのでしょうか。「わたしの名のためにどんなに苦しまなくてはならないかを、わたしは彼に示そう」(使徒言行録 9:16) との言葉が、そのことを物語っているように思います。パウロが有能で、立派で優れていた。だから、神はそのパウロを選んで、ラクラク素晴らしい働きをさせたのではない。そうではなく、どうしようもないほどのキリスト嫌いだったにもかかわらず、神は慈しみをもって そんなパウロを選び、そしてそんなパウロだったからこそ、容易でない伝道を「恵みの重荷」として負わせられたのだらうと思います。

私たちの生きる世界はどうでしょうか。そこは、自分にどこか素晴らしいところがあり、何か優れた点があつて初めて認められ、そして受け入れてもらえる、そんな世界ではないでしょうか。いいところの出で、有名な学校を卒業して、頭がいい。多芸多才で、有能で、あれもできるし、これもできる。仕事もでき、社会的にも認められ、影響力がある。そうしたあれこれが人間としての評価を決める世界に生きています。そんな私たちにとって、聖書の世界はまさに、それとは違う世界です。自分が何かしら誇るべきものを持っているとプライドを抱いたそのとき、聖書の世界では逆に、異質な者とされる。そんな虚しいプライドも含め、自分の内なる貧しさをそのまま認め、風呂敷を広げて裸で神の御前に出るとき、そのとき、聖書の世界では逆に受け入れてもらえるからです。パウロの場合、そのことを神の側から、思わぬかたちで引き起こされたのでしょう。

以前、誰がどう読んでも否定できないことが福音書にはある、と申し上げたかと思います。そのとき述べたのは、イエス・キリストは形骸化した体裁ばかりのユダヤ教を終始一貫、厳しく批判された、ということでした。今回は、それにもう一つ、付け加えさせていただきたいと思います。それは、^{みづか}自らの内に誇るものを持った、いわゆる出来のいい模範的な人々のもとには、主イエスは御自分からは進んで赴かれなかった、ということです。主イエスが御自分から積極的に関わっていかれたのはむしろ、それとは逆の人たちでした。^{しょうふ}娼婦や徴税人やハンセン病患者といった、出来のいい人々からは見下されていた無学で汚れている、いわゆるどうしようもない罪人たちでした。そうした人々にこそ、イエス・キリストは積極的に関わっていかれた。それは、自身の中に何一つ誇れるものを持たない人たちでした。そんな彼らにもかかわらず、そしてそんな彼らだからこそ、主イエスは御自分のほうから関わっていかれた。ここに、イエス・キリストのもたらされた良き音信が、すなわち福音があり、聖書の信仰の核心があるように思われます。私たちは、神の前に誇るべき何ものをも、誇りうる何ものをも持ち合わせていない。しかし、それにもかかわらず、そうだからこそ、神は受け入れてくださるのではないのでしょうか。それが、聖書の語る「恵みの世界」だろうと思います。私たちの取り柄はただ一つ、誇るべきものを何も持たないという、ただそのことだけです。そのことを忘れて、自分の誇りを誇り始めるとき、私たちは主イエスの神から遠ざかってゆくように思われます。

その意味で、世間の常識の枠から出られない人々にとっては、イエス・キリストはたしかに、^{つまず}躓き以外の何ものでもなくなるのでしょう。実際、甘んじて十字架を受けられる、弱くみすばらしい救い主の姿。これは間違いなく、躓きの一つと言えます。と同時に、私たちの常識を超えた「にもかかわらず」「だからこそ」の世界。これもまた同様に、躓きの一つと言えるのではないのでしょうか。しかも、そこに聖書の信仰の核心があるがゆえに、たとえ躓きであっても、決してどけることのできない躓きと言わざるをえません。

そのようななか、しかし、ヨハネは言います。33節、「〔イエス・キリストの〕^{あか}その証しを受け入れる者は、神が真実であることを確認したことになる」。そして36節、そのように

して「御子を信じる人は永遠の命を得ている」と。ヨハネが「確認した」と語る言葉は、原語のギリシア語 ($\epsilon\sigma\phi\rho\acute{\alpha}\gamma\iota\sigma\epsilon\nu < \sigma\phi\rho\alpha\gamma\iota\zeta\omega$) では「証印を押して保証する」ことを意味しています。今日の言い方では、「捺印をして、内容保証をする」ことです。契約書などの法的文書に、同意のしるしとして、証明の印を押す。そのように、イエス・キリストの言葉と行ないを神を証しするものと認め、そこで示された神を真実なお方と証言するということです。そのようにして主イエスの証しされる神を受け入れるとき、権利書が土地や建物の所有を保証するように、「永遠の命」の保証がすでに私たちに与えられている、とヨハネは語ります。

ちなみに、「神の怒り」に関する直後の言葉 (36) については、日本基督教団の加藤常昭 (隠退) 牧師が次のような説明を付しておられます。

気をつけてほしい、神の怒りが続けて新しく起こるというのではなくて、続けて、そのまま居座ると書いてある……。なぜか。神の怒りが初めからわれわれの上にあった……。信じておいた方が少しはしあわせだから、というような問題で〔は〕ない。

「御子に従わない者は、命にあずかることがないばかりか、神の怒りがその上にとどまる」とあるのを受けた説明です。下されるというのではなく「とどまる」というのですから、それはそもそもあったことになります。つまりは、神の怒りは初めから、私たちの前に置かれていた、ということなのでしょう。そしてそれは、私たちが選ぶその選びによって、すなわち 私たちの受け止め方や生き方によって、その結果となって 私たちに及んでくる、ということではないでしょうか。旧約聖書の「申命記」に次のような記述がありますが (申命記 30:15~20)、このことに関係しているように思われます。

見よ、わたしは今日、命と幸い、死と災いをあなたの前に置く。……わたしは今日、天と地をあなたたちに対する証人として呼び出し、生と死、祝福と呪いをあなたの前に置く。あなたは命を選び、あなたもあなたの子孫も命を得るようにし、あなたの神、主を愛し、御声を聞き、主につき従いなさい。それが、まさしくあなたの命であり……

人生は分かれ道の連続であり、選びの連続です。今日、何を大切に、どう生きるか。たしかに、それが明日の自分を決めていきます。そして、明日また、何を選んで、何を抛りどころとするか。それが再び、次の自分を決めてゆくのでしょう。そのような進み行きのなか、イエス・キリストにある生き方をどう歩むのか、日ごとにそれをどう重ねるのか、そのことが大切な分かれ道になってくる、と聖書は語りかけているのだらうと思います。私たちに宛てて記された「いのちの手紙=聖書」に心の耳を静かに傾け、文字どおり躓きに躓くことなく、いのちを、幸いを、そして祝福を選び取っていきたくと願います。

終わりに、皆さん おそらく、気になっておられることでしょう。キリスト教の信仰に対する阿刀田^{あとうだ}さんの心情はどのようなものなのか。その点に関連し、前述の「パウロの回心」の文章の結びに御自身の心境を記しておられますので、それを御紹介して、今月の「わたしの心に・・・」を終えさせていただきますと思います。

パウロの宣教旅行は総計二万キロに及んでいる。地球の半分を行く距離である。当時の交通手段を考えれば、これがどれほどの難業か たやすく見当がつくだらう。その旅のありさまは、

“苦勞したことはずっと多く、投獄されたこともずっと多く、鞭打^{むち}たれたことは比較できないほど多く、死ぬような目に遭^あったことも度々^{たびたび}でした。・・・”

であった。それもみな キリスト者としての証しを示すため、イエスの教えを広めるため・・・。まことに凄絶^{せいぜつ こうはんせい}な後半生であった。

.....

私はバーの片隅で強烈なラキ酒を飲みながら パウロの生涯を思った。

— あれは・・・なんだったのかな —

.....

信仰をもたない私は、イエスの顕現^{けんげん}をそのまま信ずることはできない。むしろ、

— パウロにはそれが必要だったろうな —

と、こざかしい思案が浮かんでしまう。

.....

— [が] それだけじゃないな —

とも思った。

パウロが宣教に費やした龐大^{ぼうだい}なエネルギーと執念を思えば、その出発点において、イエスの声を実際に聞き、イエスを実際に見なかったならば、

— あそこまではやれない —

と、そんな判断も生まれてくる。

他人^{だま}を騙すことはできても、自分を騙すことはできない。少なくとも主観的には パウロは絶対にイエスを“見た”のだらう。だからこそ、それを原点として 彼の神学が確立できたのだらう。

.....

聖書は信仰から入って読むべきものだらうが、私には その道は適さなかった。知識から入るよりほかになかった。それが長年^{つちか}培った私の方法論なのだから・・・。

いつか 私も信仰を持つ日があるのかもしれない。そのときはきっと イエスの教えをたどるだらう。知識から信仰へ、そんな道筋もないではあるまい。

〔祈り〕

愛する神様。

私たちの常識を超えた、あなたの恵みを感謝いたします。あなたの下さる「にもかかわらず」「だからこそ」の恵みの内に、私たち人間の貧しい現実と、それでもなお 私たちを追い求めてやまないあなたの愛の大きさを知ります。

心の目を開いてくださる神様。

私たちの心を開いて、あなたに向けさせてください。そして、選ぶべきものを選び取り、あなたのいのちで満たされるよう、日ごとの歩みを導いてください。近づきたもう御子イエス・キリストの足音に耳を澄ませつつ、信仰の心をあなたに向けて高く上げることができますように。

主の御名^{みな}によって願い、お祈りいたします。

アーメン